



耐久高等学校同窓会報

耐久



特集号

NO. 30

創立160周年記念寄贈

「通用門アプローチ整備・
インターロッキング設置」

平成24年7月21日着工 ~ 8月24日竣工

創立一六〇周年挨拶

創立一六〇周年実行委員長

下野 憲 英



母校が創立一六〇周年を迎え、旧制耐久中学校・有田高等学校及び耐久高等学校の卒業生、また、校長先生はじめ諸先生方と在校生そして保護者の皆さん、さらには関係者の皆様方とお祝いすると共に、新たに歴史が積み重ねられたことに大きな喜びを感じる次第です。

生徒諸君にあつては、一六〇周年という機会に本校で学ぶことは幸せなことであり、この感動・感激を貴重な思い出として永く後輩諸君に伝えていってほしいと思います。

本校は嘉永5年（1852年）、濱口梧陵・濱口東江・岩崎明岳の三氏が、将来国家の担い手となるべき青年子弟の教育に力を傾けようと考え、この理想実現の第一歩として広村（現在の広川町）に「稽古場」を開き、永続を誓って「耐久社」と名付けられ、その後「耐久学舎」「和歌山県立耐久中学

校」と改称。昭和23年（1948年）有田高等学校と併合して「和歌山県立耐久高等学校」が発足いたしました。一六〇年の時の流れの中で、様々な変遷がありました。この間にあつても、耐久の名は消えることなく、建学の精神は脈々と受け継がれてまいりました。卒業生は二万七千有余名を数え、各界で活躍し、国家・社会に多大の貢献をなす人材を多く輩出してまいりました。その歴史と伝統は全国一を誇ります。

輝かしい伝統と歴史を築き上げた、先賢・先輩に対し敬意と感謝を申し上げます。

この大きな節目に当たり、ささやかながら下記の記事を実施しました。

- 1、母校と同窓生をつなぐ絆として12年ぶりに会員名簿を発行
 - 2、国際理解教育が進められてから30周年を記念して「頑張れ母校！先輩が先生」の講演会
 - 3、歴代の校長先生及び有田郡市中学校の校長先生をお招きしたそれぞれの教育懇談会（本校の果たすべき役割や要望等についてご意見やご提言をいただきました。）
 - 4、一六〇年の歴史を綴る「記念展示」
 - 5、記念式典後のアトラクション
- 同窓生有志による朗読「濱口梧

陵物語

本校マンドリン部の演奏と広小生校生の合唱「稲むらの火」津波から村を守った男の話

6、東京大学名誉教授谷口維紹先生による「記念講演」

これらの記念事業によって、本校の歴史と伝統を振り返ると共に一六〇周年後への充実発展に大きなエネルギーをいただきました。

なお、今回記念グッズ「ハンドタオル」を販売し、多くの皆様のご協力を得て、その売上金で通用門へインターロッキングを設置し記念寄贈いたしました。有り難うございました。

今、我が国は大きな激変期を迎えており、教育の果たす役割はますます重要になってきております。特に本校を取り巻く教育環境も厳しいものがございます。

私たちは一六〇周年を新たな出発点として、伝統の灯を燃やし続け、校訓である「真・健・美」の精神をしつかり受け継ぐと共に、そのうえに新しい歴史を築き上げ、更なる発展に努める決意でございます。

創立一六〇周年に際し、会員並びに記念事業にご尽力いただきました皆様方に御礼申し上げますと共に、更なるご支援・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

創立160周年実行委員会・経過報告

H21年 11月19日 第1回準備委員会		H24年 2月15日 第8回実行委員会	記念パンフ 他
H22年 6月30日 第2回準備委員会	実行委員長・副実行委員長 決定	4月26日 第9回実行委員会	歴代校長懇談会・先輩が先生 他
7月28日 第3回準備委員会	実行委員メンバー決定・委嘱	6月20日 第10回実行委員会	各部予算 他
9月29日 第1回実行委員会	実行委員自己紹介・記念事業 等	8月 2日 第11回実行委員会	来賓招待状・式典次第 他
11月17日 第2回実行委員会	事業内容・記念グッズ 他	9月27日 第12回実行委員会	会場準備・アトラクション練習 他
H23年 1月20日 第3回実行委員会	同窓会名簿・記念式典 他	10月23日 第13回実行委員会	司会者原稿確認・受付準備 他
3月 2日 第4回実行委員会	組織・業務内容・役割分担 他	10月30日 第14回実行委員会	最終確認・パンフ袋詰め作業
5月19日 第5回実行委員会	記念展示・アトラクション 他	11月 3日 創立160周年記念式典	
7月28日 第6回実行委員会	式典司会・広小合唱 他		
11月17日 第7回実行委員会	航空写真・学校への寄贈品 他		

ご挨拶

学校長 堀 潔



潔

平成24年度の人事異動によりまして、創立一六〇周年を迎えた全国屈指の歴史と伝統に輝く県立耐久高等学校長を拝命致しました。このような立派な学校の校長に就任させていただくことを光榮に思いますとともに、その責務の重大さに身の引き締まる思いが致します。湯浅の地は初めてですが、本校のために一生懸命努力する所存ですので、どうぞ宜しくお願い致します。

変遷してきた日本史の中で、政治・社会的変革期が幾つかあります。その中でも、幕末から明治維新は、封建的な幕藩体制から近代国家への改革期であり最大の転換期といえます。当時の日本人は江戸幕府の崩壊、藩の解体により、それまでのアイデンティティを失いました。「太平の眠りを覚ます上喜撰(蒸気船)」といわれた1853年(嘉永6年)の黒船来航の前年、

1858年(安政5年)「慶應義塾」の祖型にあたる学塾の開校に先駆けること6年前、耐久創立三翁(濱口梧陵、濱口東江、岩崎明岳)は郷里の青年子弟の教育のため「稽古場」を創設しました。近代社会人としての合理的な思想を教育を通じて広め、日本の近代化を支える人材を育成し、明治維新という大転換期に、幕末の志士たちと違うカテゴリーの日本人としての精神の在り方を説きました。嘉永の昔、僻隅の地であった広村の「耐久」に、近代日本の教育の魁がありました。

生徒諸君は、この耐久創立一六〇周年の記念式典に出席できたことを、大きな喜びとして下さい。そして、先輩の皆さんが築き上げてこられた光り輝く伝統を、今ここに学ぶ諸君が享受し、立派に受け継ぎ守りながら、本校のさらなる栄光の礎を確立して欲しいと願っています。皆さんが変動の激しい現代社会に逞しく適応していくために、この一六〇年という時の刻みを、生徒自らが積極的に学ぶ姿勢と果敢に行動する力を養い、豊かな想像性や柔軟な思考力を育てる契機とするよう期待します。そのことが、一人ひとりの人間性を高め、本校の伝統と歴史をより重厚なものとしていくことと考えます。

結びに、母校「耐久」をこよなく愛され、堅い絆で結ばれている同窓会の皆様、日頃から本校教育の進展に絶大なご支援・ご協力をいただいております。保護者の皆様、そして職員・生徒の努力で、耐久高校のさらなる充実・発展を目指して参りたいと思っております。今後とも、皆様方の本校への変わらぬご支援とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。ご挨拶といたします。

耐久高校に着任して

定時制教頭 木原まり子



耐久高等学校同窓会の皆様には、日頃本校教育の充実発展のため、公私にわたりご支援ご理解をいただきありがとうございます。

私は、本年度四月に海南高等学校美里分校から転任して参りました。耐久高校の校舎に入って最初に驚いたのは、彫刻や書画の展示の多さであり、

更に、本年度は創立一六〇周年を迎えるということにも驚かされました。同時に、それは本校が多く立派な人材を輩出してきた証であり、連綿と受け継がれてきた誇り高き歴史と伝統を守っていくこうとする熱き思いと、温暖な気候に合った人々の心の温かさ、高い理想を追い求める凛とした姿に触れた気がしたからでした。

奇しくも、今年はおリンピックが開催された年でもあります。選手が力の限り競技をする姿はメダルの有無よりも感動的で、それは日々の厳しい練習の積み重ねによるものであり、結果として日本は過去最多のメダル獲得へとつながったのだと思います。

定時制に在籍する生徒たちの半数以上はアルバイト等で働きながら勉強していますが、そのことは並大抵のことではありませんし、また、他の様々な課題を抱えている生徒も多くいます。そんな彼らが、日々の努力によって自分自身の困難を乗り越え、この耐久高校の定時制で学べたことに自信と誇りを持ち、卒業して良かった同窓生となつて良かったと思えるよう、全職員一丸となり一人ひとりを大事にした教育を目指して、学校作りに取り組んでいく所存です。

特集

校歌をめぐる思い出など

清水康夫 (高1期)



1945(昭和20)年8月15日正午、終戦詔書の玉音放送を、現広川町の耐久中学校校庭で整列して聞きました。ラジオは雑音が多く、よく聞き取れませんでした。放送が終わって、先生から終戦の詔勅であった旨の説明があったと思うのですが、腑に落ちないままでした。一億玉碎はあっても、勝つことなしに戦いが終わることは有り得ないと思っていた、というよりも信じなければならぬのだと思いつめていたのです。そのときの空の色や周りの様子はどうであったか、どうしても思い出せません。それは、旧制県立耐久中学3年生、14歳の夏でした。

敗戦を境に、学校の様子は一変しました。軍国主義の教育から民主主義の教育へとという教育理念の転換は、全く前後のつながりのない不意打ちのようなものでしたから、先生方も困らされたでしょうし、生徒の側も何をどう信じたらよいのか分からないという混乱状態に巻き込まれていたと思います。

◇ ◇ ◇

戦後、学校制度の改革によって、耐

久高校が開校したのは、1948年(昭和23)年5月10日です。旧制耐久中学・有田高女が統合されて生まれたものです。校名に「耐久」を残すために多くの方々が尽力されたと聞きました。校舎は有田高女に決まりました。私は旧制耐久中学5年を終えて、開校したばかりの耐久高校3年生に進級しました。だから高校第1回の卒業生になるわけです。

高校の発足当時は、戦後3年近く経っていて、学校をめぐる状況もようやく安定してきていたと思います。生徒の中では、思いは人それぞれであつたらうと思えますが、大方は戦時中決意していた「国の大事に殉ずる」という覚悟は何であつたのだろうという思いが吹っ切れないままにも、これから新しい時代が開けるのだ、自分たちはその先頭に立っているのだという明るい雰囲気や支配していたような気がします。男女が同じ教室で机を並べて学ぶようになったことも大きく影響したと思います。若々しい夢を歌った「青山脈」のメロディーがやがてしきりに流れ始めるころのことです。有志が集まって自主的に発行した『耐中新聞』や後継の『耐久新聞』などにも当時の様子が見えられます。校歌はそのような状況の中で生まれました。

◇ ◇ ◇

新制耐久高校の発足に当って、校章・校歌について公募という形で生徒の作品が選ばれたのは、自主的活動を育てようという学校の方針によるものだったのかもしれないと思います。生徒としてもそれに応じて、よし自分たちの手で作ろうという気持ちになりました。私の場合、生意気な高ぶりから、身の程もわきまえず、軽はずみに応募してしまったのだと思います。今思うと恥かしい限りです。

◇ ◇ ◇

ある日、先生から、「君の作品が最も優れているとして選ばれたよ。中身はもつとよくなるように一緒に考えてみようね。」という意味のことばをいただきました。その後、作曲を担当された植村保先生が、曲との関係で用語を少し変えさせてもらったからねとおっしゃいました。そして出来上がったのが今の校歌です。応募したものどろいぶん変わってしまったなと思った記憶があるのですが、何がどう変わったのか、今となってはよくわかりません。歌詞に優れたところがあるとすれば、先生のご指導によるものです。

◇ ◇ ◇

この校歌が最初に歌われたのは、1948(昭和23)年10月22日から行われた開校記念文化祭においてだったようです(本校事務室所蔵の『沿革史』)。60年以上も昔のことです。確かに、10月22日の日付で、歌詞が校歌として採用されるの名誉を得たので開校記念式の盛典に際しその功を表彰する

旨の、佐山武夫学校長名による表彰状が手許に残っていますが、どうしてか私はその場の様子をよく覚えていないのです。記念文化祭の雑用にでも心を奪われていたのかもしれない。

◇ ◇ ◇

この校歌にどのような思いをこめたのかと聞かれると、返答に困ります。歌詞が全てで、歌詞以外のものはないのですから。歌う方々それぞれが、自分の思いを見出していただけだと思います。校歌は個人の作品として意味があるのではないと考えます。校歌となった時点で、作者を離れ作者の手の届かないものになっているのだと思います。

◇ ◇ ◇

校歌はそこに集う人々によって共有されるものです。様々な場で、様々な思いをこめて多くの人々に歌われ、歌い継がれることによって、それはより豊かな意味を与えられ、育まれていくのだと考えます。この歌が耐久にゆかりある人々の耐久を思う心の拠りどころとして、歌い継がれることを願っています。

※この文章は、昨年の関西耐久会総会でお話しをする代わりにと、会場で朗読していただいた原稿に一部手を加えたものです。

- プロフィール
- ・旧金屋町出身
 - ・旧中42期、高校1期卒
 - ・本校国語科勤務(1957~1981年)
 - ・耐久同窓会役員等

母校への、ご理解とご支援を！

創立160周年イベント
国際交流30周年記念

「がんばれ母校！先輩が先生」

5月25日（金）、本校平成30年卒業（高校43期生）の早稲田大学国際コミュニケーションセンター榎木裕子先生をお迎えし、「旅するチカラ」自然が教えてくれたこと」をテーマにご講演いただきました。下野憲英実行委員長をはじめ、同窓会・PTA関係者約30名も参加され、全校生徒とともに聴講されました。

先生は耐久高校1年生の時、本校の短期留学事業で、姉妹校である米国ミネソタ州ケンブリッジアイサントイ高校でホームステイや、授業等に参加したことをきっかけに、国際理解の素地が芽生え、大学時代にアメリカ留学を経験し、卒業後は通訳・翻訳業務に従事されました。現在は早稲田大学にて異文化理解・異文化交流プログラムの企画・立案業務を通じて多文化共生キャンパス、グローバルリーダーの育成に携わるなど活躍されています。ご講演はこれまでの訪問国77か国の様子や、数々の経験のもと自らの夢を実現させる過程、また現在の高校生・母校の後輩達に望むことなど、高校生にとって将来を考える上で大変参考となる内容でした。



また創立
一六〇周年プ
レ・国際交流
30周年記念に
ふさわしい講
演会となりま
した。

生徒感想記

3年 生徒会長 林 克磨

榎木裕子先生の講演を聴いて、一人の人間として、すぐく学びたいと思うところがありました。それは、榎木先生のチャレンジ精神です。

先生は「旅をしていると、小さなチャレンジがたくさんある」とおっしゃっていました。私はその通りだと思いました。旅をするということがすでに大きなチャレンジなのに、旅の途中にも小さなチャレンジをするという精神は、見習いたいと思いました。また、先生は「世界を旅することで、自分のできることが発見できる」とおっしゃっていました。そして、若いうちに世界を旅して世界を知ることが私たちに勧めてくれました。私も機会があれば旅をしたいと思いました。私だけでなくこのように感じた生徒もたくさんいたと思います。

榎木先生は、耐久高校出身、私たちの先輩です。私は、榎木先生のような向上心が高く素晴らしい人生経験をしている人が、この耐久高校から出ていることを、生徒会長として大変うれしく誇りに思います。私も歴史と伝統を持つ母校耐久の名に恥じぬよう、チャレンジ精神を忘れず、高校生活を送っていききたいと思います。

3年 植田 彩

私は今日の講演を聞いて「あたりまえ」という言葉のこわさと「あたりまえ」から抜け出すことの難しさを学びました。どんなに美しい砂丘の景色もずっと見続けていると「あたりまえ」

になり、その美しさが分からなくなるという現地の人のお話。ここが「あたりまえ」のこわさなんだと思いました。それと同時に私たちも「あたりまえ」に支配されながら生きているんだと思いました。箸を使って食事をする、誰かにものを贈るときどんなに高価なものでも「つまらないものですが…」ということば、私たち日本人にとつては「あたりまえ」なのです。

この「あたりまえ」から脱却することが異文化理解の第一歩なのではないでしょうか。言葉の通じない所へ自ら飛び込み、小さなチャレンジを重ねてこられた榎木先生の生き方はとても私にはできないと感じました。私は自分の殻に閉じこもりがちで、なかなかそこから抜け出せない臆病者です。しかし、今日の先生のお話をきっかけに、少しずつでも「あたりまえ」からの脱却にチャレンジしていかなければと思えました。

「旅のチカラ」を

未来への力に

教諭 宮崎 裕之

耐久高校は、1977年以来、世界のさまざまな地域の人々との交流を目指し、生徒たちや訪れるすべての方々に向かって「Talk together, walk together」と呼びかけています。これまで、長期・短期の留学生を受け入れたり、本校からも海外への留学派遣を実施してきました。多くの人々の理解と絆があり、長い間

このプログラムが引き継がれ、手渡して温められてきたことを強く感じます。

耐久高校国際プログラムの特徴の1つに「リターンズ」が上げられます。大人になって耐久高校を再訪問したり、家族を連れホストファミリーを訪れたり、クリスマスカードや近況の便りをくれる海外留学生もいれば、日本からも頻りに外国の「もう一つの家族」を訪ねていく卒業生「リターンズ」もいるようです。現在も、特にアメリカ、ニュージーランド、中国の姉妹校を中心に、国際教育の取り組みを進めています。本日は講演を頂いた榎木先生も、高校時代はアメリカの姉妹校への短期留学に参加されて、その後の進路に大きく影響を受けたとのことでした。先生が訪問された興味深い地域やそこでの素敵な人々との出会いの「花」を咲かせるのに、耐久高校の国際教育が一助になっていたことは、このプログラムに関わった者としても本当に嬉しいことです。

榎木先生の講演を通して、異文化体験の「おすそわけ」をいただき、素敵な時間を過ごせた本校の生徒たちが、今後ますますに広く世界に目を向け、また、世界に力強く飛び出せる気概を高めてくれることを期待しています。それに加え、榎木先生がこれからの様々な活躍をされ、後輩たちにその体験を持ち帰ってきて頂けることを楽しみにしています。

創立 160 周年記念展示 内容

平成 24 年 11 月 2 日 (金) 9:00 ~ 16:30

11 月 3 日 (土) 9:00 ~ 16:30

展示教室 1

- 1 創立者三翁 濱口 梧陵 (文政 3 ~ 明治 18) 有田郡広川町出身
濱口 東江 (享和元 ~ 明治 7) 有田市宮原町出身
岩崎 明岳 (天保元 ~ 大正 3) 有田郡湯浅町出身
- 2 中興の祖 濱口 容所 (文久 2 ~ 大正 2) 有田郡広川町出身
「耐久学舎」舎長



旧教科書

3 私立耐久中学

初代校長 宝山 良雄 (明治 39 ~ 大正 2 在職)

校訓「真・美・健」三綱領制定

4 濱口梧陵像の鋳型 (半身)

5 「稲むらの火」新旧教科書*

6 国会法案資料 *

7 旧制中学絵はがき *

8 旧制中学・有田高女 写真・アルバム

*印の展示品は西博義氏 (高19期・衆議院議員) からの寄贈によるものです。



新教科書

展示教室 2

1 すばらしい先輩

田中 武雄 (政治行政) 明治 42 年卒
小野 真次 (政治行政) 明治 43 年卒
法眼 晋作 (政治行政) 昭和 2 年卒
瀬藤 象二 (産業経済) 明治 42 年卒

貴族院議員・創立 90 周年記念式典講演者

衆議院議員・和歌山県知事

外務事務次官・創立 130 周年記念式典講演者

東京大学名誉教授・文化勲章受賞・創立 120 周年記念式典講演者

土岐 政蔵 (学 術) 明治 42 年卒
中井 常蔵 (学 術) 大正 14 年卒
千川 純一 (学 術) 昭和 23 年卒
津村建四朗 (学 術) 昭和 27 年卒
谷口 維紹 (学 術) 昭和 41 年卒

経営学博士第一号・創立 120 周年記念式典講演者

国定教科書 (小学 5 年用)「稲むらの火」作者

文部省高エネルギー物理学研究所名誉教授・学士院賞受賞

(財) 日本気象協会顧問・創立 140 周年記念式典講演者

東京大学名誉教授・学士院賞受賞・文化功労者顕彰

創立 160 周年記念式典講演者

酒井 敏行 (学 術) 昭和 47 年卒
長谷川利行 (芸 術) 明治 39 年在学
木下 繁 (芸 術) 大正 15 年卒
松本やえ子 (教 員) 大正 13 年卒
北山 谿太 (教 員) 大正 10 ~

京都府立大学大学院教授・創立 150 周年記念式典講演者

洋画家

彫刻家・日本芸術院賞受賞

有田高女教職員・和歌山県女性校長第一号

有田高女教職員・源氏物語辞典編集

昭和 6 年在職

2 耐久 160 年の歩み

嘉永 5 年 (1852) ~ 平成 24 年 (2012) までを歴史年表と写真等で振り返る

「稽古場」→「耐久社」→「耐久学舎」

「私立耐久中学校」→「県立耐久中学校」

「有田郡立高等女学校」→「県立有田高等女学校」→「県立耐久高等学校」

3 書道部作品

旧中・高女・高校「校歌」

4 歴代校長の書

「真・健・美」

5 創立 150 周年・創立 160 周年航空写真

貸し出し用校章小旗と名札を用意しています。同期会の集いに、ご利用下さい。(事務局)

耐久中学こぼれ話

我が耐久高校は、幾星霜を経て、今秋創立百六十周年の盛儀を迎える。

開校以来幾多の先輩達が「真・健・美」の精神の下にその伝統を受け継いで来たかを識り、今後の有り様を示唆する糧として、その言動の一端を紹介したい。

圃中 忠太(二期生)

私は耐久中学校の第一回目の卒業生で、寶山良雄先生という立派な校長先生に教えられた。

寄宿舎生活を過ごしたがブタ・ニワトリを飼ったり自炊をしたりして楽しかった。

遠征に来た早稲田大学の野球クラブを負かした。



旧制 耐久中学校 全景

宮本 真次(二期生)

入学試験もなく耐久社に入った。途中で校舎が「西の浜」に移転した。私立耐久中学校となり、寶山先生のもといい先生が集まつてきた。私は暗いうちに家を出て、途中で日の出を迎え、歩きながら英語の単語を覚えたものです。

直山 種吉(三期生)

耐久は本当に自由な学園であった。寶山校長には「修身」を教えてもらった。英語の「自習論」を教わり、今でもその出だしは覚えている。梧陵祭の日には全校生みんなで八幡神社へお参りに行った。

北村 松丘(五期生)

寶山校長は温厚で学識豊かな人だった。自学・自習をモットーとした耐久は全国に名を知られ、遠くからも入学してきた。

佐原 毅(八期生)

極端とも言える自由主義教育だった。寶山校長は詩吟も好きで、全校生を松原に集め、海に向かって大声で詩吟を唸ったものだ。

最初徒歩通学だったが、下駄が一週間もたず、途中でへばって下宿の止むなみにいった。

湯田 圭一(七期生)

寶山校長は一代進んだ教育をやってくれた。英語を教わった。その影響で英語教師になり、長い間高校の教壇に立った。在校中発火演習・夜会など楽しい思い出がある。生徒の劇やピアノの演奏をやり、

地元の人たちにも公開して大盛況だった。

白子松次郎(九期生)

私は野球部で二塁手で、遠征試合で負けた時には頭を剃刀で綺麗に剃って帰校した。上級生の制裁はきつかった。和中には勝ち越し耐久野球部は強かった。

栗原 吉雄(十期生)

濱口容所さん宅に寄宿していた。容所さんには手広く仕事をされ、家が貧しい生徒には学費を援助された。

寶山校長は実行で人を導く方で、遠泳の時も生徒と一緒に泳がれた。

卒業式の際は濱口家で園遊会が催され卒業生が招待され、すし・てんぷらそしてビールまで出て楽しかった。

市間 光三(十期生)

頭がよくても体が弱かったら駄目とスポーツが盛んになった。冬期朝五時に始まる寒稽古には提灯を持って参加した。楽しかったのは「那耆湾」でのボート漕ぎ、卒業記念に植物園を作ったこと、日数はかかったが立派な庭園になった。

原 太一(十四期生)

楽しかったのは発火演習で、敵味方に分かれてやったが、雨の中で敵味方を間違えられ、えらい目があった。

卒業の時、優等生というので徳川さんから銀時計を貰い、新聞にも顔写真が載った。

野原 茂八(十六期生)

耐久校史旧制中学の部の編集を担当した。完成まで三年以上要したが、濱口恵璋先生が保存されておられた資料を参考



発火演習

赤桐 栄一(十七期生)

小説ばかり読んでいて、あまり学校の勉強はしなかった。図書館の本は殆ど読んだ。ロシア文学に凝り、ロマンチックな小説めいたものを「三十一会報」に寄稿した。創立七十周年記念の時、小川琢治博士の講演を聴き大変感銘を受けた。

かくして耐久中学は歴史を刻みながら発展を続けたが配属将校による軍事教練の強化など、自由の砦にも暗い影が兆しはじめた。

以上、旧制中学校編であるが、明治末期より地域から、湯浅に女子の中等教育の必要性をとの声があがり、大正七年有田郡会において設置が決定し、有田高等女学校として、終戦まで二十九期生を育み、新制耐久高等学校にバトンタッチした。

耐久懐古

有田高女こぼれ話

栖原喜美栄 (二期生)

校舎がまだ出来ていなかったため、入学試験は那役所で受けた。あこがれの女学校に入学し、間もなく完成した木の香りも新しい校舎は嬉しかった。林校長は自愛に満ちた人でした。まだ学校の周囲は何もなく、みんなで家から木を持ち寄って植えた。遠足・運動会など楽しいことばかり。少人数だったため、大変家庭的でした。

松本やえ子 (三期生)

先生と生徒のまとまりがあり、なごやかでした。二年生の時、和歌山市で女学生ばかりの学芸大会があり、有田高女からも参加しました。汽車がなく歩いて行き、大勢の都会の女学生に混じり、話し方や朗吟などをした。木綿の着物は有田高女だけで、恥ずかしい想いもしました。林校長は人格者で有田高女の基礎をお創りになった。

藪前 うた (二期生)

入学した時、桜が満開で女学校はいいなあと思った。とにかく校舎はきれいで、これが私らの自慢だった。バレーボールと陸上競技をやっていた。バレーで明治神宮大会に出たが、初めての体育館の試合で、あがってしまっただけ。次の明治神宮大会では、円盤投げと砲丸投げに出場した。校長先生が熱心だったので、みんなスポーツにがんばりました。

竹中力ズ代 (十五期生)

永野校長が「女は淑やかでなければならぬ」というので、お茶・お花・琴を奨励された。課外授業で行儀作法を教わった。バレーボールをしていましたが、当時は運動中でも



分列行進



学校農園にて

靴下を履いていました。夏休みには寄宿舎で合宿して楽しかった。刈藻島からの遠泳もやり、女でも五千メートル、三千メートルの長い距離を泳ぎました。

伏木富紀子 (二十二期生)

戦争が激しくなり、報国隊の活動ばかりでした。「カシラー右ツ」と、分列行進をよくやりました。防火訓練や、運動場に穴を掘り、どこでも炊き出しができるよう、簡単な炊事設備を作りました。千人針は授業中も出来、寅年の私達の級は、年の分だけ縫えるといい、忙しかった。初めて動員されたのも、ちょうど私達の同期の人達でした。

寺杣 せい (二十四期生)

明石市の川崎航空に動員され、旋盤を動かしたり、ネジを作ったり大変でした。工場が空襲を受けた時は、生きた心地がしなかった。一日中防空壕でみんなで泣いたり手を合わせたり……。それに寮の食事は不味く、玄米が出ればいい程。おかずもネコマタギという不味い魚。中には栄養失調になる人もいました。

耐久高校相撲部の歴史

池辺正晴 (高15期)

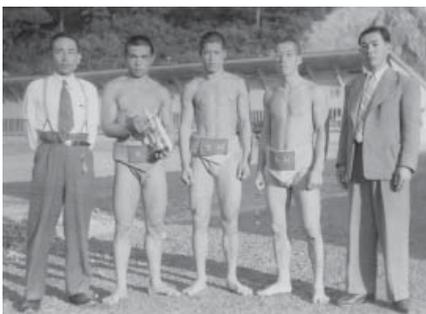
敗戦後の物心両面の欠乏の中で、いち早く伝統的な国技に錬磨し特筆すべき戦績をあげ、全国的に耐久高校ありと注視された歴史を紹介します。

大正七年から九年にかけての耐久中学時代の輝かしい戦績を基盤に県知事小野真次氏を名誉会長に迎え、

会長に大橋紀男氏、幹事長に上野寛氏(創立百五十周年実行委員長)、その他各界の名士が幹事に名を連ねて、耐久高校相撲部後援会が発足されました。

当時の耐久高校に於いては、文武両道との理解があり、スポーツに熱心な森三男三郎先生、上山昊先生、故玉置邦彦先生と長期に部長を務めていただきました。

尚、当時の後援会にとっては、県大会優勝は当たり前で、近畿大会で三位内に入賞が出来ない時は、叱咤激励され、あくまでも全国制覇が目標でありました。



(左から) 部長・玉置邦彦、土岐禧夫、富上 正、宮本寿尚、監督・上野 寛 (昭和25年頃)

当時の全国大会及び

近畿大会の戦績

全国大会 団体戦

優勝三回 準優勝二回

三位入賞三回

全国大会 個人戦

優勝三回 準優勝一回

三位入賞三回

近畿大会 団体戦

優勝六回 準優勝八回

三位入賞九回

近畿大会 個人戦

優勝七回 準優勝四回

三位入賞二回

右記のような輝かしい戦績を残して来ましたが、昭和四十年以降、学校を取り巻く社会の変化とともに相撲部員も減少し、長期に亘り相撲部に厚い熱意と情熱を注いでいただいた後援会が解散し、昭和四十五年三月、耐久高校の相撲部が解散しました。

回想「ロングハイキング」

旧職員 南 健治

先日、同窓会報「耐久」に「ロングハイキング」について記事を書くようになったの依頼があった。

それで、現在どのような実施状況かお聞きするため、久しぶりに耐久高校を訪れた。河本教頭先生と白井先生から、昨年度は秋の豪雨により通行止めが発生し中止せざるを得なかったが、今年で33回目を数え、今では耐久高校の名物行事になっているとお聞きした。発足時を知っている者の一人として非常に感慨深く、また、長く継承されていることに嬉しさと感謝の気持ち



こみあげてきた。

さて、この行事を立ち上げた動機などについて少し書いてみたいと思う。

第1回「ロングハイキング」は1980（昭和55）年8月末に実施されたが、その1年ほど前に、NHKのテレビ番組で、長野県立松本深志高校の「100km夜行軍」が紹介された。その番組を英語科の宮地弥寿夫先生（故人）と私が偶然にも見ている、100kmは無理としても、自然と親しみながら長距離を歩くことで心身を鍛え、目標達成の充実感を味わい、やればできるという気持ちを持たせるため、この種の行事の実施が耐久高校に必要ではないかとの結論になった。当時、私が特別活動部を受け持っていた関係で、具体的な内容を検討し、要項を作成することになった。当時の耐久高校生は、「まじめだけれどおとなしい、迫力に欠ける」、「いい子だが積極性に欠け、自分に自信が持てない」などと評されていた。これらの点を克服し、精神的強靱さを身に付けるための一助になればと期待し、実施することに決定した。実施学年及び時期は、中弛みになりやすい2年生の夏休み中の行事に位置付けることとした。歩く距離は、男子36・6km―高野山―清水町（現有田川町）立八幡中学校まで、女子27・6km―高野山―板尾大橋まで、と決まった。

実施要項は決まったが行事名をどうしたものかとみんなで検討したがなかなかいいのが思い浮かばない。ある日、

同じ英語科の藪添泰弘先生（後の耐久高校長）が、図書館でアメリカからの留学生（ジョン・ポーター君）と話している所へ私が行き、藪添先生と2人でジョン君にこの行事のあらましを話し、英語でいい名前を考えてくれないかと頼んだ。競争ではないこと、自分のペースで、また、友達と話しながら周囲の風景を楽しみながらゴールまでしっかり歩くことなどを話すと、「ハイキングだね、それもロングハイキングだね」とつぶやいた。「これはいい」と私はひざを打って、即座に決めてしまった。従って「ロングハイキング」の名付け親はもちろん留学生のジョン・ポーター君なのである。

また、高校生のときは、「ロングハイキング」なんて足が痛く、しんどいだけであまり楽しくなかったとの不平もあつたが、それを経験した生徒たちが卒業し、大学・専門学校等で他校出身の学生たちと学校生活を過ごす中で、「ロングハイキング」や耐久高校での生活が話題に上り、他校出身の学生からは、「そんな行事やつてくれる学校っていいね、私たちも行きたかった」などと羨ましがられたという話を卒業生から多く聞いた。耐久の卒業生は当時を懐かしく想うと同時に、この



行事なども肯定的に受けとめ、他校にはないものに一種の誇りのようなものを感じてくれていたように思った。私の当時のとてもうれしかった思い出の一つである。

追記・「耐久校史―150周年記念―」中の「ロングハイキング」の項で、校史編集委員の先生から私に「ロングハイキング」に関する取材があり、私の持っている情報をすべて提供した。従って、本原稿も校史中の記事と内容及び表現等で同一のところが多々あることをお許しいただきたい。

橋本佳巳前同窓会長と共に

耐久高校前同窓会事務局 辻岡俊明

「辻やん！ もうすぐ、創立一六〇周年やのう。今日は見舞いに来てくれておおきによ！」これが橋本佳巳前同窓会長の私への最後の言葉となりました。体調を崩され、入院している御坊の北出病院に見舞いに行った2011年（平成23年）7月1日のことでした。

私と橋本会長（高4期）との関わりは、私が1997年（平成9年）に同窓会事務局に入り、当時副会長であった橋本氏に8月12日夜8時頃、とき



故：橋本前会長（右端上から2人目）と平成8年度同窓会役員

の役員選考委員5名の方々と次期耐久高校同窓会長を引き受けていただくことをお願いに上がったことから始まります。

当初固辞されていた橋本氏に6名全員で粘り強く何回もお願いをして何とか会長就任を聞き入れていただきました。そしてその秋の同窓会総会で正式に会長就任が決定しました。会長就任に当たつての抱負は同窓会の活性化と5年後に迫った大きな節目となる創立一五〇周年関連事業を成功させることでした。会長は5年間の前半は同窓会の活性化のために注力し、後半は一五〇周年関連事業成功のために注力しました。

同窓会活性化のためになされたことは、同窓会体制を見直して、新たに関東耐久会、関西耐久会、和歌山耐久会、有田耐久会の立ち上げと年2回の同窓会報の発行、そして最新の同窓会名簿の発刊でした。特に同窓会報については何回も編集委員会を開いて作成し、その発行費用を広告料で賄うために自ら先頭に立って広告を取りに回られ、編集委員の中ではいつもトップの数でした。

また後半の一五〇周年関連では6つの部からなる記念事業実行委員会の立ち上げと目標額1億5千万円の寄付金集めの取り組みでした。2000年11月に立ち上げた実行委員会委員長には旧中41期の上野寛氏（元県教育委員長）に就任いただき、強力な体制の下、以降20数回の実行委員会を開催して一五〇周年記念式典・記念事業等を成功させました。



故：上野 寛 氏

寄附金を頂いて大きな事業をするために会長と何校かを訪問して、その取り組みの成り功例や失敗例を聞かせてもらったり、寄附の

免税措置を受けるために税務署を訪れ、色々失礼をしないための話を一緒に訊きました。

話を聞けば聞くほどまた指導を受ければ受けるほど、しなければならぬことの量や越えなければならぬ敷居の高さが分かってきて気が重くなってきましたが、会長は「こんなことで滅入っていたら何にも出来へんで。多くの実行委員さんの力を借りれば何てことはないよ。」と私を元気づけ、勇気づけてくれました。一事が万事、こういう調子で困難を乗り越えていきました。

立场上、上野実行委員長や橋本会長と話し合った行動を共にすることがよくありましたが、彼等は総てに前向きでパワフルで、一緒に居ると不可能なことは無いという気分になせられました。実際、学校敷地内に記念碑等の基礎付き建造物の設置を認めていなかった当時の県教育委員会との間で記念事業の一つである濱口梧陵翁銅像の校地内設置を巡って物議を醸しましたが、何回かの県教委とのやり取りの末、銅像設置が実現しました。私は実現は難しいと思っていたので、このときはばかりは二人のパワーと実行力に恐れ入り、本当に不可能は無いを実感しました。

常に母校の発展と同窓会の活性化を目指して行動していた橋本会長には色々教えられることが多かったし、知り合ってから私の精神的支柱でありました。「辻やん！ 母校の教壇に立って、後輩を教えられるほど幸せなことはないよ。」とよく言われた言葉が忘れられません。

私にとってそして学校・同窓会にとっても大切な人物を亡くしましたが、いまは高所より同窓会の更なる発展と我々後輩一同の活躍を見守ってくれていると信じています。いま改めてご冥福をお祈りします。

関西耐久会

みんなで作ろう!! 「楽しく、ちよつとためになる関西耐久会」

主役の座 まだまだ降りぬ 秋うちわ
 なんて拙句が思わず口に出るほどの残暑
 厳しい9月2日(日)、今年も122名の同窓生がホテル大阪ベイタワーに集結しました。6年間、関西耐久会をこのように充実した同窓会にするため尽力された萩平勲会長(10期)が退き、そのバトンを引き継いだのは、8人兄弟姉妹全員が耐久高校卒業という横山享会長(14期)です。「一六〇年の伝統ある耐久高校、がんばっている後輩をみんなで応援し、楽しい同窓会としましょう!」という力強い挨拶から総会が始まりました。

同窓会本部の下野憲英会長のご祝辞の後、サプライズがありました。萩平前会長に感謝のプレートが手渡されたのです。川



日本原子力研究開発機構
 研修センター 津浦 伸次 先生

関西耐久会幹事長
 地引 民子(高17期)

本陽子さん(18期)手作りのプリザードフラワーも全メンバーの気持ちを代表。堀潔校長先生からは、後輩のがんばりをいろいろ聞くことができました。(6月にも学校訪問をさせていただき、お世話になりました。)

さて、今年の講演は、津浦伸次様(20期)による「放射線の基礎と人体への影響」です。タイムリーなお話を伺うことができ、みんなとても真剣でした。

懇親会はホテルの料理も立派でおいしいですが、何といっても「なれずし」「金山寺味噌」「しらす」「よもぎ餅」が一番人気。戎子良雄さん(10期)のハーモニカ、竹とんぼで宴がさらに盛り上がり、いつもの各期ごとの写真撮影。やっぱり今年も15期が一番、28名!!!

最長老4期の宮井昭治様と津村建四朗様による万歳三唱、則岡宏牟副会長(18期)の閉会の言葉で幕を閉じました。来年も皆様とお会いできることを楽しみにしております。

関西耐久会ゴルフ

コンパ開催

第12回のゴルフコンパを平成24年5月11日(金)に泉南カントリークラブにて27名の参加で開催しました。

当日は天気にもぐまれ多数の参加でみんな和気あいあいの中無事開催することが出来ました。

第13回は10月12日(金)に開催しました。次回は平成25年5月17日(金)に開催を予定しています。

同窓生皆様方の多数の御参加をお待ちしています。



関西耐久会ゴルフ幹事
 岡 伸彦(高14期)

和歌山耐久会

和歌山耐久会総会

9月21日(金)午後6時、和歌山市華月殿にて、3年に一度の和歌山耐久会総会が開催されました。和歌山市周辺の同窓生約60名の参加を得て、約三時間にわたり和やかに旧交を温めました。

本年は創立一六〇周年の年にあたり、それを記念しての講演(講師 菊池武昭氏 テーマ「菊池海荘と耐久舎」)も企画されました。菊池武昭氏は菊池海荘の子孫で、耐久舎の創立者濱口梧陵との交友等、大変興味深い講演を聴かせて頂きました。

尚、来賓には、堀潔耐久高等学校校長、下野憲英耐久高校同窓会長、横山享関西耐久会会長、柏原政夫美有田耐久会会長、白井敏之耐久高校同窓会事務局長らをお迎えして、創立一六〇周年記念式典(11月3日)の成功を誓い合いました。



菊池氏と田辺会長

幹事長 中田 實宏

同窓会への問いかけ・ご提言は、何なりとお申し出下さい。(事務局)

関東耐久会

関東耐久会総会

平成24年5月27日(日)に関東耐久会総会をホテルメトロポリタンで行いました。関西からお越し頂いた来賓の方14名を含め総勢64名で校歌斉唱後、関東耐久会の九鬼利郎会長の進行で議事をまとめました。

来賓の耐久高等学校校長 堀潔様、湯浅町長上山章善様、同窓会長下野憲英様からは挨拶の言葉を頂きました。懇親会前のアトラクションでは、和歌山大学学長 山本健慈様が「ヒトが育つ社会を創る・和歌山で育ったシニア・ミドルに期待」という大変興味深い講演をお聞かせ下さいました。

懇親会の食事には毎回用意される「なれ寿司」が好評で紀州有田の懐かしい味を堪能し、和やかな雰囲気の中で滞りなく総会を行うことが出来ました。

つきましては、平成24年度は関東耐久会の役員改選となりましたので、左記ご案内します。



- 会長 大野 博司
- 副会長(幹事長) 前 郁夫
- 副会長 東 健次
- 小島美津子
- 富山 節子
- 塚本かよ子
- 川崎 一登
- 木村 達
- 九鬼 利郎
- 中村 久和
- 上野 清
- 北野 正治
- 監事 木村 達
- 最高顧問 九鬼 利郎
- 顧問 中村 久和



旧中37期

耐久学舎創立160周年によせて

昭和十九年春三月、那耆湾頭の松涛の声に送られて、戦中戦後のきびしい社会を無我夢中で生き残り、あつという間に六十年の歳月を経た今日此頃です。

振り返ってみると、人の一生は大変長いようで短いものであると思います。その為には学生時代に自分の生涯の夢を持ち、その目標を立て達成に向かってエネルギーを集結させることが大切だと痛感し反省するものです。又、人にとつて、生まれ育った古里の山河は、今更ながら有り難く忘れられない出来な

い宝物であります。郷関を出て六十有余、寸暇や時に触れ、若き日の学友の想いが強く出てくるものです。特に、戦争に征き、短い人生に散り逝ったあの青春の顔が何時までも消えないものです。毎年暮れになると生家から有田の味と香りのみかんが届きます。古里は好きもの、懐かしきものです。

古里の母なる山のみかんかな
登るほど海開けゆく花みかん

在京の同期生五名は今尚健在で、共に関東耐久会に入会して、毎年総会日に出席しお互いの交流を深めて居り、それを最高の喜びと元氣付けの場として活用し、感謝して居ります。

特に今年は創立一六〇年の記念すべき年に当たり、この歴史の節目に出会った幸運を感謝して貧者の一燈の寸志を送りますので、ご利用下さい。今後共に耐久学舎の良き歴史の積み重ねによる御発展を心から期待して居ります。

平成二十四年五月二十七日

旧中三十七期生 在京者一同



旧制耐久中学校展望
齊藤 勇吉 氏 画

- 久堀 三郎
- 堀江 識
- 西島 広
- 生駒 三郎
- 谷口以佐雄(旧姓林)

有田耐久会

有田耐久会活動報告

花見の会

平成24年4月5日
場所：有田川町「愛宕山」

バスツアー

平成24年4月15日
行先：ツタンカーメン展と
新神戸ロープウェイ・
布引ハーブ園

ゴルフコンペ開催

平成24年3月14日
場所：有田東急ゴルフクラブ
42名参加

平成24年9月12日

次回予告

平成25年3月13日





高4期

六〇年目の感慨

昭和二十七年卒業の三四人、六〇周年の会を白浜「しらら荘」で開いた。

バスは、藤並駅で全員乗車、生石を遠望したあと「那耆の海」を街越しに見る高速南下のコースをとった。海を隔て湯崎のはなを望む温泉で旅情を楽しんだり、思い出話に時を過ごしたりして、やがて大広間に。

美酒、ウーロン茶に山海の珍味と自由闊達な宴となる。その本領は、「しゃべくり・駄弁の奨励」(但シ同ジ話ハ二回マデニ制限)に加え、「自薦の芸能勝手放題」(決シテ逆ラワナイ・元氣ヲホメル)、それに「飲み過ぎ・ド力喰いの規制」を軸に時は進む。



清楚なドレスで体を締め上げ照れることなく登場したNサン、女装歌謡ショーで注目を浴びる。和装のYIサンは「日舞」でのご奉仕、小柄な彼女の何と大きく堂々と見えたことか。大舞台は決して広すぎなかった。

翌五月二十一日、朝食をずらし世紀の金環日食を白砂青松の白良浜で観る幸せをいただいた。

帰路のバスは音楽教室。なつかしの「故郷」などを歌い継ぎ、なき恩師には「仰げば尊し」を捧げる。この期に及び「星影のワルツ」の情感共に味わう。予餞会でしんみり聴いた「白い花の咲く頃」も。すべてはNサンの「口吸い式手風琴風小型楽器」による伴奏、リードで車内いっぱい合唱となる。

感傷のひと時、Aサンは詩を朗読する。「誰にも見せない泪があつた 人知れず流した泪があつた」「いくつもの日々を越えて辿り着いた今がある だからもう迷わずに進めばよい」と続く応援歌「栄光の架け橋」を。

労苦に打ち克つて過ごしてきたそれぞれの人生に表彰状を贈り合った夕べ。体調思わしからず残念と便りを寄越した友の回復を祈った旅でもあり、また鎮魂の集いともなった。

皆サンには、今日のほほえみとこの穏やかな日々が一日でも長く続きますように、別れの手を振り続ける。「ごきげんよう」「ごきげんよろしゅうに」

有本 充



高6期

関東同期会の開催

恒例の耐久高校6期生関東同期会が、快晴に恵まれた5月13日東京汐留の伝通ビル46階「美寿思」で開催されました。出席者は15名：関東在住者13名、湯浅から川口清司君。岐阜県大垣市から北村拓朗君が参加して下さいました。

案外間近に東京湾、北東側に竣工になった「スカイツリー」眼下に「皇居」と「浜離宮恩賜庭園」を望める部屋に会場を設定、幹事役小宅貞夫の開会の挨拶、遠路出席して下さいた北村拓朗君の発声で母校の発展と同志の健康を祈念して乾盃、和やかに開会の運びとなりました。



え合いながら全員順次に近況を語り合いました。懐かしい耐久時代の思い出話。居住地での社会奉仕のこと、各々の趣味のこと、特に旅行、囲碁、写真、ゴルフ、登山等、久々の会合で話題が限りなく広がりました。川口君の差し入れで全員大好物の金山寺味噌を味わい、うまい酒を酌み交わしながら、食事会もあつという間に過ぎゆきました。

最後に次期幹事を引き受けて下さった北村治君の三本締め、そして毎回お世話になる北村治君にお願いで全員で記念写真を撮って頂きました。この後「浜離宮恩賜庭園」を散策、更に東京都観光汽船で隅田川を遡上、竣工になった「スカイツリー」を仰ぎながら浅草吾妻橋に上陸、近くの喫茶店で談合の後、翌年の再会を約束して散会となりました。

顧みれば私共も母校を巣立つてから58年という年月を過ごして、今年には喜寿の年令を迎えました。体力も万全とはいきませんが、現役で頑張っている同志も多数居ります。

郷里を遠く離れて開く同期会、出席者も多勢とは云えませんが、母校を愛し、ふるさとを思う心は全員熱いものがあります。後に続く若人の成長を願いつつ、恩師、先輩への感謝の気持ちを忘れることなく、お互いに強い絆を大切にして、関東同期会をいつまでも続けてゆきたいと思

小宅 貞夫(旧姓中邑)



高5期

漁火の白浜で！ わたしたち One Family-

みかんの花の香り漂う、5月17日、18日「自然豊かな白浜で、一夜を語り明かし、今日まで培ってきた絆をより深めよう」との呼びかけで集った39名、思っていたより皆さん若く元気であった。

平日であったので、他に1グループが宴会していたが、コガノイベホテルを占拠。館内に、しののめなびく生石山、夕日に映ゆる那耆の海...の音が響く。その後46名の天界に逝った友に黙祷、懐かしい顔が浮かび、心から冥福を祈った。



司会の榎野直爾君の張りのある声でとんとんと進行。夏見任巨君が世話人を代表して心温まる挨拶、「喜寿を迎え1泊での旅はこれが最後では」に、皆フオウとの元気な声。

以前の御馳走に手をつけるのに少々遅れたが、京都の西谷俊二君のこの会への思いと大きな発声で「カンパイ！」会場は一気に空気が緩む。隣同士との思い出話が弾み、勉強やクラブのこと、お世話になった先生方の思い出やエピソード。将又「はつ恋」のこ

と等、垣根を越えた交流で心と心が深まってゆく。青春時代の純粹さ、苦しみや悩みを乗り越えてきた年齢の重さ、苦難を耐えた原点であった。学生時代へと一気に心が華やいでゆく。

思ったこともあった。しかしどん底の日本を力を合

せ短い期間で復興を支えてきたのは私たち。やがて世界一の所得を獲得した夢のような時代を生きてきた。

そんな思い出と共に会場が盛り上がり、カラオケや日本舞踊や「冬のソナタ」のチェ・ジュに負けじと新川利子さんが作った韓国衣裳で三人の女性が登場狭しと踊り回って最高潮にポリウムを上げてくれた。最後に「ふるさと」を一同で歌って、閉会を阿瀬誠一郎君に中心めしてもらった。今日を「心の杖」に強く生き抜こうと誓い合った。二次会で夜を更かし、翌日は三々五々、白浜を散策し、東京はじめ各地に帰った。

蔵野 圭一



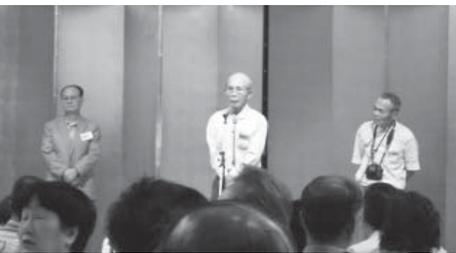
高19期

創立百六十周年記念同窓会

梅雨明け間近の七月十六日、ホテルグランティア和歌山において、高校十九期生同窓会が開催された。これまで、オリンピッククイヤーに定期的に開催してきたクラスや、時々開催するクラスなど様々であったが、今年には母校創立一六〇周年という記念すべき年であることや卒業四十五年という節目に当たるとい

ことで、久々の全クラス合同の同窓会になった。三組担任の谷口敏彦先生、六組の長谷康富先生、八組の栗原俊文先生にお越し頂くとともに、総勢一六六名の参加があり大盛況であった。

開宴に先立つて、三クラス毎に記念写真を撮影した後、懇親会場に移り、須佐見勉・法眼貞子君の司会のもと、まず逝かれた恩師と友への黙祷を捧げ、小澤良和君の開会の挨拶、三名の恩師の



お言葉、柏原政夫美有田耐久会会長挨拶と続いた。ご出席いただいた三名の先生方はすぐお元気で、近況や当時の思い出などをお話し下さり、なつかしく一時の生徒に戻ることができた。

吉松 敏隆

高16期

昭和39年卒1・2・3組の集い

母校創立一六〇周年の年、平成24年6月3日宮原の橘家で1・2・3組の同窓会を開催致しました。

遠くは千葉県より駆けつけて頂き58名の参加でした。

開会そして物故者（担任恩師3名同期生14名）のご冥福をお祈りし、黙祷を捧げました。物故者は、前回集いより4名増えてなんとも言えない寂しい気持ちになりました。世話人より「創立160周年をむかえる母校に一度立ち寄りて下さい」との挨拶。卒業の年は、新幹線開通、東京オリンピックと好況でしたがその後オイルショック・バブル崩壊・円高・神戸又東北の大震災・原発事故等色々ありました。その時々で苦労も沢山ありました。



卒業以来48年振りに話合う内に記憶が蘇り握手する方、前回より2年振りの方、地元で昨日会った方等も、本会での再会を喜び、猛暑の中のきつい部活、寒中マラソン、楽しかった修学旅行、あこがれの方とのフォー

クダンス等青春の高校生時代にタイムスリップし、賑やかな時間が過ぎて行きました。

都合がつかず残念ながら欠席となった方々の近況・メッセージを拝見し、懐かしいお顔思い浮かべ読ませて頂き、次回是非出席を祈りました。

吉本顔負け？のどつと沸いた奇抜な歌謡笑劇おどろも飛び入り参加、淑やかな元女学生のおどりに見惚れ、又久し振りの校歌に苦楽の高校時代を思い起こし目頭を熱くする方もいました。写真趣味の方はシャッターチャンスを見逃しませんでした。48年の経過もそれなりに写真に収まりました。

話の中で今年厚労省が名付けた「健康寿命」を1年でも延ばすには、健康自己管理第一との話も出て健康への関心の高さがうかがえました。又、病に伏す友に「祈健」の寄せ書を皆で書き、届けました。今回は卒業50年の節目、「初の1〜5組全組同窓会」を予定しています。

皆から頂いた活力で健康を維持して、次回も是非の参加を強く約束し、閉会しました。

二次会は場所を移し湯浅ドリムで、賑やかにカラオケで高校時代の懐かしい歌、ジュエツトでした。又、青春の1ページを振り返り、時間を忘れ話込み、時間オーバーするほど楽しいひとときを過ごし、盛会の中別れを惜しみつつ散会しました。

下羅 雅信

高10期

「耐久高校第10期生同窓会」を開催して

和歌山城の桜がほころび始めた、平成24年4月1日。場所をこれまでの地元から和歌山市の「アバローム紀の国」に移しての開催となりました。在校時、五つのクラスで共に学んだ仲間のうち73名の出席を得て、大いに盛り上がりました。

開会の挨拶、物故者への黙祷を捧げた後、宴となりました。スクリーンでは、在校時の写真が映し出され、懐かしい昔にタイムスリップしつつ、思い出話を花を咲かせました。

カラオケで、得意のものを披露される方、学生時代とは、うって変わった仲間の意外な一面も発見された、楽しいひとときを過ごしました。また、「ピングゲーム」に興じ、あつという間に時間が過ぎてゆきました。

最後に、戎子良雄氏のハーモニカの演奏で校歌を合唱し、二年後の再会を約束し、惜しみながらの閉会となりました。

鍵野 春美

『編集後記』

野山の木々が紅葉する錦秋の季節になりました。

耐久高等学校創立百六十周年記念式典を迎え、特集三十号をお届けします。通常の内容に記念特集を加味して編集しています。

下野憲英実行委員長をはじめとする「創立百六十周年記念事業実行委員会」を早々に組織し、「ささやかに、そして充実した記念事業」をモットーにして、式典部・イベント部・記念展示部・記念事業部・総務部と役割を分担し取り組んできました。

同窓会名簿の発行や記念グッズの販売では、多くの皆様のご支援をいただきました。

本年度から堀潔校長先生と木原まり子教頭先生（定時制）をお迎えし、ご挨拶を寄稿していただき、特集として本校校歌の作詞者、清水康夫氏に「校歌をめぐる思い出」について執筆いただきました。さらに旧制耐久中学や有田高女、耐久高校時代の貴重な懐かしい「こぼれ話」や記念事業に関連した懇談会、記念展示内容など掲載しています。お世話になった恩師や先輩諸氏を懐古しながらご覧くださいます。

来る十一月三日（土）の記念式典には、皆さんお誘い合わせて、是非ご参集ください。

誇り高く輝かしい歴史と伝統をもつ我が耐久高等学校の益々の発展と同窓会の更なる充実を祈念致します。

本会報の発行に際し、多くの方々からご支援・ご協力をいただき、心からお礼を申し上げます。

- ◆ご献金に感謝
- ・ 旧中37期在京五名様
 - ・ 有田高女同窓会様
 - ・ 高1期同窓会様
 - ・ 高4期一同様
 - ・ 高16期1・2・3組様
 - ・ 高19期同窓会様
 - ・ 匿名18期生様